

## 2月第1週の礼拝説教

- 日 時：2023年2月5日（日）10：30－11：30 降誕節第6主日
- 説 教：保科けい子 牧師
- 説教題：「聞く耳のある者は」
- 聖 書：ルカによる福音書8章4～15節（新約p118）
- 讃美歌：51「愛するイエスよ、」412「昔主イエスの蒔きたまいし、」

主イエスは、ご自分のもとに集まって来た多くの人々に教えをお語りになる時に、たくさんの方のたとえ話をなさいました。本日の聖書箇所ルカによる福音書第8章4節以下には、

「種を蒔く人のたとえ」が語られています。この話は、マタイによる福音書、マルコによる福音書にもあるので、多くの人々に伝えられており、主イエスの語られたたとえ話を代表するものの一つであると言えます。子どもさんびかにも取り上げられているぐらいですから、4節から8節のたとえ話は、誰にでもよく理解できる内容です。ただし、私たちの感覚から言えば、なぜ種を蒔く人は、最初から良い耕した土地に全部の種を蒔かなかったのだろうかという疑問が生じてくるのではないのでしょうか。このことは、私も実際にイスラエルに行って、少し荒れ野の近くに行き、初めてわかりました。現代の日本や欧米の国のように、土地をよく耕してふかふかにし肥料を十分に与えてから種をまくというのではなく、主イエスの時代には国土の多くが荒れ野に近い石ころだらけの土地だったイスラエルでは、道端や石地や茨の生えている土地や作物が育つような良い土地がきちんと整備されていなかったと思われまます。ですから、このたとえ話は、その当時に最も身近なところでなされていた農業をそのまま表しているのです。そして、マタイとマルコは「石だらけで土の少ない所」と記しているのに、ルカによる福音書だけは、「石地」という言葉を用いています。元の言葉は「岩（ペトラ）」で、そこからシモン・ペトロを連想することもできるのです。けれども、不思議なことに主イエスはこのたとえ話の最後に「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。」のです。

ところで、一般にたとえ話といえは、伝えたい事柄をより具体的に分かりやすくさせるために用いられます。しかし、主イエスのたとえ話は、聞いている人々に理解させないために語っている場合があると言われていいます。9節で、周囲にいた弟子たちがたとえの意味を、主イエスに尋ねています。それに対して主イエスは、「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、『彼らが見ても見えず、聞いても理解できない』ようになるためである」。とお答えになりました。この箇所は、旧約聖書イザヤ書6章9節から10節の言葉を引用しつつ、たとえを用

いて話すのは「彼らが見ても見えず、聞いても理解できない」ようになるためだと言っておられます。このイザヤ書6章というのは、預言者イザヤが神様によって召されて預言者として遣わされる場面ですが、そこで神様ご自身が語っておられるのは、イザヤが預言者として遣わされ、神様のみ言葉を語っても、人々はそれを理解せず、悔い改めようとしない、ということです。み言葉が語られても人々がそれを理解せず、受け入れない、たとえ話もそれと同じように、語られても理解されないことがあるのだと主イエスは言われたのです。そのような主イエスのお答えは、その場にいた弟子たちにも、非常に意外な印象を与えたと思いますし、私たちもなんとなく納得できないような思いがいたします。それではたとえ話が語られる意味がないではないか、と私たちは思います。しかしそうではないのです。主イエスはここで、たとえ話が語られる意味をきちんと示しておられます。ここでは、「あなたがた」と「他の人々」とが対比されています。「あなたがた」というのは、弟子たちのことで主イエスに従っている人々です。「他の人々」というのは、4節に語られている、主イエスのもとに集まって来た大勢の群衆たちです。主イエスは弟子たちも含めたこの群衆に「種を蒔く人のたとえ」をお語りになりました。それが8節までです。そして9節以下は、群衆が去って弟子たちと共にいる時に、弟子たちの問いに答えてお語りになったことです。たとえ話とその説明が分けられているのは、このように、語られた相手が違うからなのです。ここでは、群衆と弟子たちとの区別がはっきりと示されており、このたとえ話は、その区別を明らかにするために語られている、ということが見えてきます。

最後に、主イエスがこのたとえ話をご自身で解説されている11節から15節を見てまいりましょう。11節の説明にあるように、種を蒔く人が蒔いている種とは、神の言葉です。神様のみ言葉という種が蒔かれる、しかしそれがどのような土地に落ちるかで、結果は変わってきます。芽も出さずに鳥に食べられたり、芽を出しても結局途中で枯れてしまって実を实らせないものもあれば、百倍の実を实らせるものもあるということです。同じ御言葉を聞いても、それが理解されよい実を結ぶ場合と、実を結ばないままで終わってしまう場合とがあり、このたとえ話は、私たちすべてに同じ種が蒔かれても、そういう違いが生じることを語っているのです。神様の御言葉を聞いても、後から悪魔がそれを奪い去ってしまう、つまり御言葉がその人の心に根付かずに失われてしまうのです。5節の「人に踏みつけられ」という言葉は、それが価値のないものとして無視される、ということを表しているとも言えます。私たちが神様の御言葉を聞いても、そこに意味を見出さずそれを無視すれば、心にそれが根付くことはなく、誰かに食べられてしまうこともよく経験することです。また13節には、「石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根

がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである」とあります。この場合は、御言葉を聞いてそれを喜んで受け入れ信じるのです。しかし、石地ですから「根が浅い」のです。私たちの信仰も、根が浅いと、試練に打ち勝つことができずに、信仰から離れてしまうことを警告しているとも言えます。それはまるで、誰よりも熱心に主イエスに従っていたはずのシモン・ペトロが、主イエスの受難から逃げてしまったことを暗示しているようにも読めます。14節には「**茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである**」とあります。この場合には、自分自身の状況というよりは、むしろ周囲からの妨げによって、せっかく芽が出て実を結ぶに至らず枯れてしまうということです。思い煩いは、悩みや苦しみや悲しみという不幸を示し、富や快樂は幸福を示しています。いずれにせよ、神様の御言葉の種が実を結んでいくための妨げになるということです。それに対して、15節は「**良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである**」とあり、御言葉の種が実を結ぶ場合を示しています。種が良い土地に落ちて百倍の実を結べば、今度は、その実を私たち自身が御言葉の種として他の人々に蒔くことができるのです。

しかし、私たちは、自分自身を良い土地であるということはなかなかできません。そのような私たちに、主イエスは今もなお「**聞く耳のある者は聞きなさい**」と大声で呼びかけてくださっています。そして、一つの御言葉が私たちに定着して実を結んだなら、そこに収穫の喜びが与えられ、また新しく自分自身の土地を耕して神様の御言葉をまいていただくという思いが湧いてくるのではないのでしょうか。石地であったペトロでさえ、主イエスの祈りによって、良い土地に変えられもう一度信仰を与えられて新しく歩みだしました。私たちもまた、主イエスの呼びかけにお答えし御言葉に聞き続けるものでありたいと思います。